

平井一臣著 『首長の暴走：あくね問題の政治学』

土肥， 勲嗣
九州大学大学院法学研究院： 専門研究員

<https://doi.org/10.15017/26468>

出版情報：政治研究. 59, pp.63-64, 2012-03-31. 九州大学法学部政治研究室
バージョン：
権利関係：



平井一臣著

『首長の暴走——あくね問題の政治学——』

(法律文化社、二〇一一年、xiii＋一七〇頁)

日本政治史を専門とする著者が『地域ファシズム』の歴史像―国家改造運動と地域政治社会』(法律文化社、二〇〇〇年)に続き単著を執筆することになったのは、勤務地である鹿児島県においてその問題が起きたからである。二〇〇八年八月に行われた阿久根市長選挙に竹原信一氏が当選した後の約二年半の間、人口二万数千人の小さな自治体の首長の言動が、全国的に注目を浴びるようになった。いわゆる「阿久根問題」である。竹原氏の言動が問題となるたびにマスメディアからコメントを求められてきた著者は、「阿久根市で起きている出来事は、他の地域でも起こりうることであり、日本の政治や社会のあり方とも結びついているのではないか」と考え、本書の執筆に至った。副題に「阿久根問題」と記さず平仮名で「あくね問題」と記しているのもこの問題の一般的・普遍的な性格に著者が着目している証左である。

第一部では阿久根市で何が起きたのかが明らかにされる。鹿児島県阿久根市は、一九六〇年代半ばに人口四万人を超えていたが、現在は二万四千人を割っており、日本全国至る所

に見られる「疲弊する地方」を象徴したような町である(四頁)。混乱の主役は、「疲弊する地方」という現状に対する「改革者」として登場し、地元の支持を拡大した竹原氏である。

竹原氏の主張のポイントは、「議会および行政の大幅な経費削減と市民サービスのための支出増」(二二頁)にある。竹原氏は、役場職員、労働組合、議会、マスメディアなどを「改革」に対する「敵」と設定し、徹底的に攻撃することによって支持を拡大するという政治手法をとった(三三)。例えば、市のホームページと自身のブログで市職員の給与と退職者の退職金を公表し、職員平均所得六五〇万円に対して阿久根市民平均所得二〇〇万円という統計上問題がある数字を宣伝し、市の職員がいかに高給なのかを強調した。また議員定数を一六名から六名に削減する案などを竹原氏が提示した結果、市長不信任決議案が全会一致で可決され、市議会は解散される事態となった。出直し市長選挙に再選した竹原氏には出席せずに専決処分をおこない、マスメディアへの対応も特定のマスメディアの取材には応じる一方で気に入らないマスメディアは排除するなど強権的な言動を繰り返した。住民によってリコール運動が展開され、最終的には二度目の出直し市長選挙で落選するものの、世論調査では阿久根市の住民の約三分の一は竹原市政を積極的に支持していたことが明らかとなっ

た。

第二部において著者が論じる「あくね問題」は明確である。ひとつは政治的リーダーシップのあり方である。トップダウン型の政策決定には絶えず権力の乱用や暴走の危険が伴うことを考えておく必要があると指摘する。二つ目のポイントは、竹原氏を支持する世論とはいったいどのようなものなのか、という問題である。竹原氏が支持された理由の一つは、彼の激しい公務員批判、特に公務員給与批判にあり、「格差社会」や「不平等社会」の問題に対する世論のあり様と深く結び付いているというのが著者の見方である。三つ目のポイントは、マスメディアが抱えている問題である。権力者がマスメディアを選別しているのに対して、マスメディア側がそれに従っている姿勢に疑問を投げかける。以上の三つのポイントを指摘した上で、小泉政権登場以後の政治の流れのなかで、〈新自由主義の心性〉が私たちが暮らす日本の社会に浸透しているのではないかとの見解を提示している。すなわち、「これまでの政府の役割や活動を極限にまで縮減して、市場の論理、民間の論理に委ねることをよしとする感覚ないしは考え方」(一二二頁)が日本社会に蔓延し、竹原氏のような首長の暴走を助長したのではないかと結論づける。その意味において、「あくね問題」は民主主義の問題であるという。

以上の通り、本書は日本本土の最南端に位置する鹿児島県のある地域で起きた出来事の詳細なルポルタージュではない。日本全国至るところにみられる「疲弊した地方」を象徴するような鹿児島県阿久根市の出来事をつぶさに観察した上で、その問題を一般化することによって、現代の日本の政治や社会のあり方に警鐘を鳴らすものである。もちろん、一般化の射程をどこまで設定しうるのか読者が検討すべき余地は残されている。しかしながら、名古屋市の河村市長や大阪市の橋下市長など、議会や市職員との対立を先鋭化させることによって支持を拡大している首長は阿久根以外の地域でも見受けられる。公務員、首長、議会、マスメディア、住民は相互にどのような関係にあるべきなのか。本書は先行き不透明な二一世紀の日本の政治や社会を考える手掛かりを示している。

(土肥勲嗣)